

(メッセ海外通信 2007年7→9月号掲載記事)

～黄金の豚の年 韓国にベビーブーム到来か～

下関市総合政策部国際課
(釜山広域市派遣職員)
久保 伸子

■2006年出生率が上昇

去る5月、韓国の統計庁が発表した2006年出産統計の暫定集計結果によると、韓国の合計特殊出生率(女性が一生に産む子供の数)が、約1.13人と3年ぶりに増加したとのことです。合計特殊出生率は、韓国で1970年には4.53人あったのですが、その後の経済発展とともに急落し、最近でも2003年1.19人、2004年1.16人、2005年1.08人と減少していました。

出生率が増加したとはいえ、他の先進国と比べると依然世界最低水準の韓国。2005年基準で、フランスの1.92人はもちろん、ドイツの1.34人、日本の1.26人(2006年は1.32人に上昇)などに比べても随分低い水準です。

■黄金の豚の年

今年の干支は丁亥。亥は日本ではイノシシですが、韓国や中国はブタで、おめでたい印象があります。特に韓国では、60年に一度の丁亥の年は「黄金の豚の年」だそうで、この年に生まれた子供は一生お金に困らないとか。加えて今年は、陰陽五行で10回に1度の丁亥…つまり60年に1度の良い年なのだそうです。

昨年末から街角で金色の豚を見かけるようになり、貯金箱をはじめとする各種金の豚グッズも、ここぞとばかり店頭に並んでいました。黄金の豚の年にあやかって、今年は2006年よりさらに出生率が増加することが期待されています。



2007年新年、海雲台海水浴場に出現した金の豚の像

■なぜ低い出生率

少子化の理由としては、晩婚化や女性の社会進出などは日本と同様ですが、韓国に特徴的なのは、莫大にかかる私的教育費(塾など学校以外にかかる教育費)の負担が挙げられることです。幼稚園の頃から音楽や絵画の塾、英会話塾、小学生からは学習塾と、韓国の子供たちは多忙です。高校3年生ともなると、朝弁当を三つ持って家を出、午前5時から学校が始まるまで塾で勉強、学校後塾で午前2時まで勉強…と驚異的な生活をしている子供もいると聞きます。

韓国の現代経済研究院は4月、子どもを塾などに通わせている全国の1012世帯を対象にアンケート調査を実施した結果、これらの世帯が私的教育に使う金額は月平均64万6000ウォン(約8万2000円)で、所得の19%台に及ぶと発表しました。子供一人にかかる私的教育費は月平均38万2000ウォン(約4万9000円)で、幼稚園から中学校までは月20万~40万ウォン(2万6000~5万1000円)、高校では月40万~60万ウォン(5万1000~7万7000円)支出する世帯が最も多かったそうです。特に高校生の子どもを持つ世帯のうちの19%は毎月100万ウォン(約12万8000円)以上を使っていることが分かりました。親も、より良い学校に入ってほしいと教育にかかるお金は惜しみませんが、あまりにかかる教育費に子供を産み控える傾向が強いようです。

2007年は黄金の豚のおかげで、おそらく出生率は上がることでしょう。しかし、これは根本的な制度改善なき一時的現象である…というのが大方の意見です。少子化に対する政府の一層積極的な取り組みが求められています。

ところで、昼食時間のおしゃべりで黄金の豚が話題になったことがあります。「今年子供を産むといいらしいね」という話をしていたところ、「今年産まない方がいいよ」と強調する同僚がいました。「同級生が多たってことは、それだけ競争が厳しいってことじゃないの」。ああ、韓国、競争社会！